

# 名義相応

延塚知道

本日は、「名義相応」というテーマで発表をさせて頂きたいと思います。親鸞は、『教行信証』『行巻』で、よく御存知の通り、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれ、もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるが故に大行と名づく。

とされています。「帰命尽十方無碍光如来」あるいは、「南無阿弥陀仏」と称名念仏する。そこに、如来智慧海の働きを、真如一実の功德宝海として、念仏する者の身に自証せしめる。その法を、大行と名づけるのである。したがって、世親の伝統で言えば、一心帰命の信に称念される帰命尽十方無碍光如来、その大行・大信こそが、われわれの願生浄土の仏道の源泉であると言われていることになります。

さらに親鸞は、その大行・大信に賜わった真如一実の功德宝海の感動を、名義相応の事実として、『浄土論註』の讃嘆門の文によって、

しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう。

と、破闇満願として押えられています。このように、われわれの無明の闇が破られればこそ、名号を真実の法と自証し、しかもそこに願生浄土というわれらの根源的意欲が回復されるのです。その感動を名義相応と言うのです。

したがって、本日申し上げようと思うことの一つは、破闇満願といわれる名義相応の自覚内容。即ち、真如一実の功徳宝海として展開する浄土の自証の内容を申し上げて、浄土がわれわれにどのような根源的意欲を回復するのかを尋ねてみたいと思います。くどいようですが、一切衆生の根源的意欲は、浄土に触れて回復されるのですが、それは一体、どのような内実を持つ意欲なのかを尋ねたいのです。

それから、もう一つは、親鸞が仏道を名義相応と言う場合。つまり、仏の教説としての名号を信ずる。そこに、われわれ凡夫が立つことのできる願生浄土の仏道の総てがあると言うのです。親鸞は、仏道をどのように語るのですが、その親鸞の了解は、大乘仏教の教理の伝統の中でも、ただちに本流をなすとは、言いがたいようです。名義相応の仏道を語るについては、大乘仏教の歴史の中でも、特に『浄土論』・『浄土論註』の了解を踏まえて言うわけでありますので、先に挙げた破闇満願の自覚内容を探るに先だって、『論』・『論註』によって、名義相応として仏道を語るまでの、大まかなスケッチと言いますか、概観を探ねてみたいのです。今日は、以上の二点を考えてみて、皆様の御批判を仰ぎたいと思います。

## 一

まず最初の問題です。大乘仏教の伝統、歴史の上では、衆生の上に仏道が実現したことを表わす言葉はいくつかあると思われませんが、世親の『浄土論』では、「如実修行相応」と言われています。さらに、「如実修行相応」した菩薩を表わす菩薩四種莊嚴の『論註』の註釈では、

真如は是れ諸法の正躰なり。躰、如にして行ずれば、則ち是れ不行なり。不行にして行ずるを如実修行と名づく。

と説いて、真如と如実修行との相即が言われています。このように、真如と相應するために最も要請される如実の修行は、伝統的に空観、唯識観と言われるように、大乘の仏教では、止観行なのです。就中、それに実現される見仏・見性であります。だから、世親もその伝統に則って、願生浄土の仏道の行である五念門の行を、礼拝・讃嘆・作願・觀察・回向とし、止観行を説く、作願・觀察の二門を、特に重要な行として、説くのです。つまり、作願・觀察の二門によって浄土を観察し、さらに浄土の主である阿弥陀仏にまみえる見仏を説くのです。そこに、阿弥陀如来の覚りである大涅槃とわれわれとが直結して、五念門の行の全体が向涅槃の行となり、大乘の仏道の行として、充分な意味を持つこととなるのです。さらに、如来の覚りと直結するわけですから、当然、われわれの自と他の分別が破られて、衆生の本来の關係が回復され、大乘菩薩道の課題である自利利他が、任運無功用に完成されていくのです。そのような内実、即ち、真如と相應する止観行の完成された事実を、世親は、如実修行相應と言うのです。

しかし、その時注意すべき大切な事は、大乘仏教の歴史の上では、この止観行が、必ずしも念仏と共に伝統されてきたとは言えないことです。例えばそれが念仏と共に説かれていても、その念仏は、称名念仏ではなく、観想念仏として了解され伝統されるのです。そうなれば当然、人間の努力によって止観行を完成するという如実修行に、重点が置かれることとなるのです。しかし世親は、この如実修行相應を、称名念仏を表わす讃嘆門に、

いかなるか讃嘆する。口業をして讃嘆したまいき。かの如来の名を称し、かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、実のごとく修行し相應せんと欲うがゆえなり。

と説いて、如実修行相應という止観行が、称名念仏に内包されていることを、示唆しているのです。実は、世親の『浄土論』の御仕事の最も重要な点がここにあり、この一点において、私は、この世親の『浄土論』が、大乘仏教の歴史の中で、金字塔とも言える意味を持つのだと思います。一般仏教で考えられたように、人間の努力によって止観行を完成し、真如と相應する仏教とは、まったく違った、名号に相應するところに止観の意義が内包されている。そ

れを明らかにして下さったのが世親の『浄土論』なのです。さらにはその一点を、かたくなまでに継承したのが、言うまでもなく曇鸞の『浄土論註』です。以下、そのような視点を外さずに曇鸞の『浄土論註』の概略を尋ねてみます。

曇鸞は、大乘の菩薩という立場とは違い、世親の教説を徹底して聞思する姿勢を貫ぬき、「普く諸の衆生と共に、

安楽国に往生せん」と、世親に呼びかけられた「外道凡夫人」として、『浄土論』の註釈をします。今の、「我作論説偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安楽国」という、世親の回向章の文にも、次のように註釈をしています。

此の四句は、是れ論主の廻向門なり。廻向とは、己が功徳を廻して普く衆生に施して（利他）、共に阿弥陀如来を見たてまつり、安楽国に生まれんとなり（自利）。

つまり、曇鸞は、よく利他教化を受けた「外道凡夫人」として、自利利他をよく果す菩薩の働きを、師の世親に仰いでいるのです。世親の『願生偈』の全体、さらには、願生浄土の仏道の上に、自利利他の働きを見えています。要するに、自らは徹底した凡夫として、師の世親の仏道に、如実修行相應の事実を仰いでいるのです。

さらには、如実修行相應している自利利他の回向行を、下巻では、

廻向に二種の相有り。一には往相、二には還相なり。

往相とは、己が功徳を以て一切衆生に廻施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめんとなり。還相とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他・毗婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしむるなり。

若は往、若は還、皆衆生を抜きて生死海を渡らんが為なり。

と、廻向に二相を開いているのです。五念門と、その果の功徳である五功德門で言えば、出の第五功德門を利他（還相）、五念門と前の四功德門を自利（往相）、とするのです。しかしここで大切なことは、世親の上に仰いでいる如実修行相應の自利利他は、単に一般仏教で考えられている自利利他ではなくて、阿弥陀の浄土に生まれていく往相に自

利を、言葉通り言えば、浄土から還来穢国して教化をする還相に利他を、仰いでいるのです。つまり、大乘菩薩行を表わす自利利他が、浄土へ生まれていく往相と、浄土から還来穢国する還相という言葉に、置き代えられていることです。要するに、曇鸞が仰いでいる世親の如実修行相應の事實は、阿弥陀の浄土によって実現していると、押えているのです。これは、世親が、止観行は称名念仏に内包されると示唆したことを、さらに一歩進めた了解として注目すべきであると思われます。つまり、本願の名号に帰した世親の、一心帰命の信心に自証されている浄土が、自利利他の源泉であると言うのです。だから、その一心帰命の信心こそ、世親の如実修行相應の事実であることを示唆していることになります。だから、その一心の表現である、「我作論說偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安樂國」に願生の仏道の総てがあると言うのです。往相・還相という言葉に即して言えば、世親の「往生安樂國」という往相(自利)・願生浄土の仏道の全体が、曇鸞にとっては、浄土から還来穢国して「普共諸衆生」を教化して、浄土へ帰ろうとする還相の菩薩の働きと仰いでいるのです。もう少し強く言えば、師の教化によって仏道に立ち得た曇鸞の感動の一点から、世親の仏道を見れば、自利利他はそれに譲り、師の仏道の全体を、往(自利)・還(利他)の二相と仰ぐと言うのです。師の教えに遇えた者の根本直覚として、師を還相の菩薩と仰ぐことは当然のことですから、曇鸞が、世親の願生浄土の仏道の全体を往相と還相の二相に開いたことは、師の教説を聞思する者として、また当然のことであると思われます。

曇鸞が『浄土論』を註釈する際の曇鸞の姿勢は、以上申し上げた事が基本であると考えます。したがって、『浄土論』の註釈部分については、如実修行相應をよく果している師の世親菩薩を憶い、仰ぎながら、『浄土論』を大乘の菩薩の論として、註釈をしていると思います。しかし、『浄土論』の註釈から外れた部分は、必ずしもそうではありません。そこは、曇鸞自身の凡夫としての仏道観をよく表わす部分として、大変重要な意味を持ちます。よく御承知の通り、上巻では、二道釈と八番問答です。それからもう一箇所、私は、下巻の他利利他の深義以降は、上巻の八番

問答と同じく、曇鸞独自の問題意識を展開した所であると了解しますので、そこは純粹には、『論』の註釈から外れた部分であると思います。いうまでもなく、二道釈は曇鸞の仏道観を、八番問答はその人間観である本願の機を表わしています。下巻の他利利他の深義以降は、一応『論』の註釈が終った後、讃嘆門に説いた破闇満願という曇鸞自身の立場を基軸にして、再応、世親の願生の仏道、特に自利利他の意味を問ひ直しているのだと思います。そこでは、

他利と利他と談ずるに左右有り。若し自ら仏をして言わば、宜しく利他と言うべし。自ら衆生をして言わば、宜しく他利と言うべし。今將に仏力を談ぜんとす。是の故に利他を以て之を言う。当に知るべし、此の意なり。

と言われます。曇鸞の立場を表わす破闇満願とは、「わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをばげみ、わがさまさまの善根をたのみ」自力の心の、徹底した懺悔の外にはありません。したがって、そこに立てば、当然、利他不能です。そもそも、凡夫が、任運無功用に遊ぶがごとく衆生を利益するなどということは、頭で考えることはできて、自らの上には実現不可能です。要するに、遊んでいるのか、利他しているのか分からないような事に、自利利他等と言える道理はありません。自と他の分別を超えて、自利が即利他であり利他が即自利という意味を持つような自利利他は、少なくとも曇鸞の上には、いや人間には実現不可能なのです。その課題をよく果すことのできる働きは、一切衆生の救済(利他)をもつて、自らの成仏(自利)とする、阿弥陀如来の本願力のみである。曇鸞は、破闇満願という体験を通して、このように自証し、了解したと思われます。そこからもう一度世親を見直せば、世親もまた如来の本願力を生きた方であればこそ、自利利他をよく果して下さった応化の菩薩として、その意義を改めて明確にしたのであると思われます。このように曇鸞は、世親の自利利他の源泉が浄土にあることを見定め、さらには、その自利利他の根源力は、阿弥陀如来の本願力にあることを示唆しているのです。

さて、親鸞は、名号に帰した自力無功の懺悔に立って、曇鸞の了解を継承し、更に進められます。名号に帰すとは、如来の名告りである本願の名号に相応することである。「衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし」とい

う一心帰命の信心こそが、名義相應の事実であると言うのです。親鸞が「信巻」で

『論註』に曰わく、「如実修行相應」と名づく。このゆえに論主建めに「我一心」と言えり。

と言う所以でもあります。この一心帰命の信心にこそ、われわれの仏道の総てはあるのです。人間的な努力で仏道に立つことのできない凡夫に、しかし、仏の教説としての名号に相應する。その信心には、後で改めて尋ねますが、浄土の功德を自証せしめる。そして、その浄土への歩みが、かえてこの現実の只中で、その浄土の功德を行証していく。そういう意義を持つ願生浄土の仏道が、この一心帰命の信心に恵まれるのです。あたかも、浄土への往相と、浄土からの還相の二つの方向を、一心帰命の信心は、同時に持つかのごとくです。

それにしても、人間の努力を待たないで、なぜそのような仏道を、一心帰命の信心には恵まれるのでしょうか。実は、それをよく果す本願の道理の推求に、親鸞は、『教行信証』で力を尽くすのです。例えば、「三一問答」しかりです。当然、明恵の『摧邪輪』に端を発した思想戦をにらんでのことです。明恵に代表されるような伝統仏教の人々や、もう少し広く言えば、世間の常識では、人間の努力を待たないで、しかも人間を涅槃に向かわしめるその一点がどうしても理解できなかったのです。

親鸞は、三一問答の願心の推求を通して一心帰命の信心の背景に、われわれをして願生せしめる働きとして、法蔵菩薩の五念五功德の願行を探り当て、仰ぐのです。したがって、親鸞においては、自利利他の「如実修行相應」、即ち如実に修行して真如と相應することをよく果すものは、法蔵菩薩の五念五功德の願行の外にはないのです。真如と相應することのできるものは、どこまでも法蔵菩薩の願行であって、われわれ凡夫の努力ではないのです。だから曇鸞が、自利利他の意味を托して語っていた、世親の往・還の二相は、親鸞においては、そのままが法蔵菩薩の働きであって、世親の根源に働いている働きは、如来の往相回向と如来の還相回向の二種の回向と了解されていくのです。それは、われわれに願生浄土の歩みを実現する根源力なのです。曇鸞は、往還の二相を世親の願生浄土の仏道の二つ

の相と仰いでいました。その限り、回向の二相は、世親の生きる姿勢と言っても誤りではないでしょう。しかし、今、親鸞においては、それをさらに根源に尋ねて、二種回向は、われわれに仏道を開いてくる如来の本願力の道理を表わす言葉と完全に転じられてくるのです。つまり、もともと大乘菩薩道の自利利他という実践行の意味を托して語っていた、往相・還相という言葉が、名号によって凡夫の救済を実現する、如来の本願力の道理を表わす言葉に完全に転じられてくるのです。そこに、如実修行というような、人間の修道性を想起せしめる言葉は完全に落とされて、如来の教説としての名号に相応する名義相応として、凡夫の仏道を展開していくのです。

このように、親鸞の名義相応という仏道の了解は、遠く、インドの大乘菩薩道の如実修行相応という言葉に、その源があるのです。だから、本願の名号に帰すという名義相応の凡夫の仏道ではあっても、そこに大乘菩薩道の歴史の全体を貫くふところの深さと、見仏に究竟していく菩薩行の厚みのある意義とを、如来の本願力の回向成就として賜わると、了解すべきであります。先に、一心帰命の信心は、往相・還相の二つの方向を同時に持つかのごとくであると申しましたが、そこにあたかも、三宝なき処へ往生し一切衆生を教化せんとする大乘の菩薩の意義、即ち、法蔵菩薩の魂を見るべきであると思います。回向の内容について踏込んで尋ねたわけでもなく、決して充分であるとは思いませんが、以上が、親鸞が名義相応として仏道を顕開するに至るまでの、雑把な概観であります。

## 二

さて、もう一つの問題です。普通、われわれが生きている場合、その生の質を決め、その人生の全てを支えるものが、その生を生きようとするわれわれの根源的な意欲です。願生浄土の仏道は、どのような内実を持つものとして、その根源的意欲をわれわれに恵むのか。それをもうしばらく尋ねたいと思います。

親鸞は、名義相応の事実を、曇鸞の了解を継承し、『教行信証』に破闇満願と説いていました。それは、「雑行を棄



てて、本願に帰す」と語るように、「わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみ」という自力の心を雑行として棄てしめられ、如来の本願に帰ることです。もっと強く言えば、それは、自我関心に振り回されて、本当に何を願って生きているのか分らない凡夫に、根源的な清浄なる意欲が発起したと言える出来事です。だから、自力の執心の懺悔として無明が破られ、如来の本願にわれわれの根源的な願いが満たされ、その願いを生きていく。その願生心の発起である回心の事実を、破闇満願というのです。したがって、一心帰命の信心とは、衆生における如来の願心の発起です。信心と願心とは、別なものではありません。その限り、願心に莊嚴される真実報土としての浄土は、衆生の信心に自証されている世界です。その道理を曇鸞は、世親の『浄土論』の観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海

の、「仏本願力」の上に見定めています。曇鸞は、この「仏本願力」を仏力と願力とに分けて、次のように註釈をしています。

言う所の不虛作住持とは、本法藏菩薩の四十八願と今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。

願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願相い符って畢竟じて差わざるが故に成就と曰う。

要するに曇鸞は、願心に呼び帰されて、仏力住持の世界へ解放されることが回心の事実である。だから、如来の本願に帰せば、そこに仏力住持の浄土の功德を自証し、その浄土の功德成就に立って、改めて法藏菩薩の願力を憶うという、仏力と願力との相互成就的なあり方こそ、一心帰命の信の内実である。だから必ずその信心には、浄土の功德莊嚴が自証される。あるいは、われわれに拳体の懺悔を起こし願心へ喚び帰される、その懺悔の体験に立って、起こるはずのない事を起こさしめた働きを真実と頷くばかりではない、その真実功德としての不虛作住持功德の働く境涯を、浄土の功德莊嚴と言うべきかもしれません。どちらにしても、それはそのまま、一心帰命の信心の内実であることに

は、かわりありません。

ともかく、そのように一心帰命の信心に自証された浄土の莊嚴功德を、世親は、浄土の二十九種莊嚴として説きました。曇鸞は『論註』下巻利行満足章で、願生の仏道を根源的に支えている大切な功德を、二十九種莊嚴の中でも特に、清淨功德、大義門功德、不虛作住持功德、菩薩莊嚴とを挙げるのです。親鸞もまた、『教行信証』『証卷』、『浄土三経往生文類』、『入出二門偈』等で、大切な功德がいくつか挙げられています。曇鸞と親鸞とは、ほぼ同じ功德を挙げていますが、親鸞の場合には、特に菩薩莊嚴がはぶかれています。それには、重要な意味があることと思われます。後で少し触れることと思いますが、時間の都合で、ここではそれに言及しません。今は、親鸞の著作の中でも、浄土の莊嚴功德が、最も簡潔に整理されていると思われる『入出二門偈』によって、一心帰命の信の自覺的な世界を尋ねてみたいと思います。

いうまでもなく『入出二門偈』は、本願の名号に帰し、如来の本願に喚び帰された感動とその自覺的世界の讃歌です。特に、法蔵菩薩の五念五功德の御苦勞に対する讃歌と言ってもよいと思います。しかし、他の著作に挙げている莊嚴功德とは違って、本願の名号の功德を讀める妙声功德は省かれています。しかし親鸞は、『入出二門偈』の全体が、『大無量寿經』下巻の本願成就文に立っていることを表わして、妙声功德を省いているように思われます。即ち

諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転

という第十八願の成就文に即して、世親の『浄土論』の帰敬序である「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」と発起序の「我依修多羅 真実功德相 說願偈総持 与仏教相应」の偈文の次第を逆にし、さらに不虛作住持功德の偈文によって、第十八願の成就という自らの自覺的立場を表わしているように思われます。それと同時に、自覺的な浄土の莊嚴功德を、清淨功德・量功德、眷属功德・大義門功德の偈文によって表わすのです。図示すれば、左記のようになります。

世親菩薩、大乘修多羅真實功德に依って、

一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。

発起序（聞其名号）

帰敬序（信心歎喜 乃至一念）

→  
（信の一念に開かれる浄土の莊嚴功德）

清浄功德・量功德

〔無量寿（時間・無量の命を得る）

眷属功德・大義門功德

〔無量光（空間・自利利他の成就）

←

かの如来の本願力を観ずるに、凡愚遇うて空しく過ぐる者なし。一心に専念すれば速かに、真實功德の大宝海を満足せしむ。  
不虛作住持功德（至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転）

さて、右記の図で分かるように、注意すべきことは、親鸞が、本願成就の自覚的世界を、清浄功德と量功德を一つの偈文として表わし、眷属功德と大義門功德を一つの偈文として表わしていることです。そして、前者を、真實報土の総相とし、後者を真實報土の働きと見ている点です。それはそのまま名義相応の自覚内容ですから、その浄土の功德が、本願の名号の名義である無量寿・無量光の世界として、開かれることを示すものでもあると思います。

浄土の総相として説かれる清浄功德は、『浄土論註』下巻では、

凡夫人の煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業畢竟して牽かず。則ち、煩惱を断ぜずして涅槃分を得。焉んぞ思議す可きや。

と説かれ、浄土とは、「五濁の世・無仏の時」を生きる凡夫に、如来智慧海に自証される涅槃分が開かれた世界とし

て説かれます。曇鸞は、この涅槃分に触れた願成就の事実に立って、そのような大いなる感動が何に由来するかを、如来の願心に尋ね入り、

仏本此の莊嚴清淨功德を起こしたもう所似は、三界は是れ虚偽の相、是れ輪転の相、是れ無窮の相にして、蜎蟻の修環するが如く、蚕繭の自ら縛る如く、哀れなるかな、衆生、此の三界顛倒の不浄に締るを見そなわして、衆生を不虚偽の処に、不輪転の処に、不無窮の処に置いて、畢竟安樂の大清淨処を得しめんと欲めす。是の故に此の清淨莊嚴功德を起こしたもうなり。

と、徹底した自らの機の自覚を、願心に返して説かれるのです。願心の所照というところに、曇鸞の宗教的自覚の透明さを教えられることですが、このように流転の身を徹底して懺悔せしめる働きこそ、清淨眞実なる涅槃界の働きに外ならないのです。

五濁無仏とは、結局眞実を失なった世界です。眞実を失なった濁世の衆生は、蜎取虫に例えられるように、同じ所を無窮に輪転して、自体満足のない流転を繰り返し、人生の全体が空しく過ぎていくこととなるだけです。そのような人生の事実を濁と言うのです。単なる教理とか教義の言葉ではありません。そして、同時に、眞実を失なえば、状況のいかに関わらず限らない自我の主張をする外はありません。その自己主張に穢れて、一切が虚偽となり、自我関心に自縛されて、蚕のように、自分で自分を包み込んで、孤独に沈む外はないのです。

このような内容を持つ、濁・穢を徹底して懺悔せしむる働きこそ、清・淨・眞実なる涅槃界として、自証されるのです。あえて言えば、清濁、淨穢と対応しているようです。それは、眞実に触れたという大いなる感動の外にはないのでしょうか、流転の衆生にとっては、眞実なる世界に願生せんという根源的志願が回復され、その志願に未来が開かれることとして、自証せしめられるのではないかと思えます。また、自我関心の徹底した懺悔は、それに自縛され孤独に沈む衆生に孤独を破って、本来的な共同の世界に解放する世界として自証せしめられるのです。要するに自我

からの解放とは、時間的には無量寿という永遠なる時間に、空間的には廣大無辺際の世界に解放され、それに生きんとする清淨意欲こそ、願生心なのです。

このように説かれる清淨功德は、諸仏の淨土にも通ずる、淨土の総相です。親鸞は、曇鸞のこのような了解を充分踏まえて、この清淨功德を「彼の世界を觀するに」という偈文に代表させ、「彼の世界を觀するに辺際なし。究竟せること廣大にして虚空のごとし」と、量功德の偈文と一つにして説かれます。したがって、清淨功德よりもむしろ、量功德の偈文の内容をもって、阿弥陀の世界である眞實報土の総相とするのです。

その量功德の成就が『論註』上巻では

成就とは、言うところは、十方衆生の往生せん者、若くは已に生じ、若くは今に生じ、若くは當に生ぜん、無量無辺なりと雖も、畢竟じて常に虚空の如く、廣大にして際無くして、終に滿つる時無からん。

と説かれます。已今當の無量無辺の衆生が生まれようとも滿つる時がないとは、淨土が、我々の時間空間の実体的分別を破った、名号による自覺的な世界であることを示すものです。国境もなく、際もないとは、どのような者が生まれようとも、それぞれが淨土の中心となって、等しく淨土を荷なって仏事を果そうとする志願を生きる者となるという意味でしょう。しかも、その淨土が、已今當を貫徹いて働く、無量寿の世界として説かれるところに、親鸞は、法藏菩薩の願心に酬報された、眞實報土の最も重要な意義を見出ししていると思われまします。

さて、先にも述べましたが、このような眞實報土が開かれた体験を、破闍滿願と説いていました。曇鸞は、その道理を、不虛作住持功德の「仏本願力」に見い出していました。繰り返すようですが、それは、法藏の願力によって宿業の身という身の事実に喚び返され、そこに果上の阿弥陀如来の仏力住持する淨土の莊嚴功德の利益を受け、その淨土に触れた感動に立って、本の法藏菩薩の願力を内觀するという、願力と仏力との相互成就的な働きこそが、願生心の内景でした。

親鸞も同じ感動を『歎異抄』で

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

と、述懐しています。「そくばくの業を持ちける身」とは

自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身と言うように、永遠の昔から流転を重ねてきた身にはかなりません。したがって先の述懐は、仏の無縁大悲の眞実報土が開かれた大いなる謝念に立つて、「そくばくの業を持ちける身」を、「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、永劫の昔から流転を重ねてきた宿業の身の、い・か・な・る・過・去・よ・り・も・過・去・に・先・だ・つ・て、法蔵菩薩の発願を内観しているのです。しかも、願生心に確かに開かれ触れている果上の阿弥陀の浄土は、宿業の身の事実に喚び返され、そこに立っているが故に、「いまだうまれざる安養の浄土」として、宿業の身のい・か・な・る・未・来・よ・り・も・純・粹・未・来として、願生せんと言わざるをえないのです。

このように、本願の名号に帰した自覚とは、未来よりも未来、過去よりも過去を包んで働く、如来の本願に帰することです。それは、一切衆生の迷いを包んで発願修行し、浄土を建立して衆生の迷いを救おうとする、如来の因果の大いなる働きの中へ、衆生の迷いの歴史の一切を見い出すことです。それは、衆生の迷いと共に歩み、迷いを転じて、無上涅槃へ解放しようとする法蔵菩薩の「仏願に乗ずるを我が命となす」という自覚に、確かに領かれている不可思議なる事実です。そして、願に乗ずるを命とすることは、宿業の身のままで、我無量寿に生きん、という自覚を生みながら、已今当を貫ぬいて働く浄土の莊嚴功德に摂せられ、支えられて、願生していくことでもあるのです。親鸞は、その大いなる感動を、量功德の文をもって、眞実報土の総相としたのであると推察します。

無量寿とは、本願成就の信の一念に開かれた、永遠の今という自覚でした。それは、平面的な時間の分別が破られ

て分段生死を超え、已今当を貫ぬいて、いつでもとして働く仏願に乗ずることでありました。しかしそれは、時間的な分別が破られるに止まらず、どこでも、誰でも、という空間的な広がりを持つ自覚でもあるはずなのです。即ち、自我関心に自縛された孤独が破られて、願心莊嚴の大乗の国土として、一切衆生の根源的な共同の世界が与えられることでもあるのです。親鸞はそれを、大義門功德と眷属功德として教えていると推察されます。

#### 大義門功德とは

往生を願する者、本は則ち三三之品なれども、今は一二の殊無し。亦、溜瀦の一味なるが如し。焉んぞ思議すべきや。

と説かれています。溜と瀦は、斉の国を流れる二つの川の名前です。それぞれの川の水は、なめて区別できるほど異なった味を持つのです。その溜水と瀦水でも海に入れば一味となるという例えで、浄土の大乗一味の平等性を説くのです。したがって、その大乗一味の平等なる働きに触れた者は、「三三之品」といわれる宿業の身の凡夫まで、如来の本願に喚び帰され、阿弥陀の仏力に住持せられて、「願に随って生を得て、三界雑生の火の中に生ずと雖も、無上菩提の種子、畢竟じて朽ず」と言われる独立者とせしめられるのです。

インドの大乗仏教では、大乘とは、どのような者も任運無功用に自利利他を行じていく菩薩となっていくことを言うのです。つまり大乘の菩薩道として、仏教が表わされるのです。周知のところであると思います。

ところが中国では、さまざまな理由によって、大乘の仏道が、菩薩道として充分に展開しないのです。むしろ菩薩を菩薩たらしめている法の顕揚に重きが置かれ、大乘が、菩薩道としてよりも、法の真実を表わす一乗として根源化され、展開するのです。つまり、どのような者も平等に救われていく、法の普遍性、真理性が、一乗として明らかにされるのです。

この大義門功德は、人間の選別意識を破って大乘一味を自証せしめ、あらゆる者を大乘の菩薩とせしめる功德です。

から、先述したことより言えば、恐らくは、インドの大乗仏教を表わしているものなのです。あとの眷属功德の方は、「如来浄華の衆は、正覚の花より化生す」と説かれ、正しく一乗を表わす功德であり、中国の大乗を代表していると考えられます。

親鸞は、善導の教学をくぐり、徹底した凡夫という自覚に立って、浄土真宗を「誓願一仏乗」という独自の表現で明らかにしました。その限り、中国の大乗、つまり曇鸞の『論註』の仏道観を継承するのです。この『入出二門偈』は、偈文ですから、浄土莊嚴の功德名は挙げられていません。しかし、功德名が挙げられている他の著作でも、この大義門功德の文は、引用されるのですが、その功德名は一切落とされ、眷属功德の文と一緒にされ、眷属功德の功德名で表わされるのです。さらには、先にも少し触れましたが菩薩莊嚴の偈文は一切引用されず、その代わりに、本願の名号を讀える名声功德が挙げられるのです。このあたりに、曇鸞の明らかにした凡夫の仏道を、親鸞は、さらに徹底していったことがよく分かります。

少し余談になりました。ともかく、この大義門功德で説かれる菩薩は、大乗一味なる浄土の功德の自証によるのです。その大乗一味は、当然、法の平等性に外なりません。その意味でこの大義門功德は、次の眷属功德と別なものではありません。したがって、大義門功德が生み出す独立者とは、「同一に念仏して」如来の本願に喚び帰され、どこでも誰でもが「如来浄華の衆」として「法蔵正覚の華より化生す」といわれる、如来の眷属として目覚めることなのです。このように、この大義門功德と眷属功德とは、一連の事柄を説いているのであって、より根源的には、人間的諸関心による選別意識が破られ、大悲内存在として如来の眷属を自証することであると思われまゝ。曇鸞は、その感動を、下巻の眷属功德釈に、次のように見事に表わすのです。

同一に念仏して、別の道無きが故に、遠く通ずるに、それ四海の内、皆兄弟とする也。眷属無量なり。焉んぞ思議す可きや。



思えば、大乘の菩薩道の課題である自利利他の行は、自利と利他とが同時にどう完成するかという実践、行の課題として、仏道の歴史の中で伝承されてきました。しかし、本願の信に自我関心が破られて、自利と利他とが相矛盾するものとしてではなく、同時に成り立つ一切衆生の関係性、即ち、如来の眷属としての根源的な共同の関係が、浄土の眷属功德として与えられるのです。「回向を首とする」如来の大悲心に、如来の眷属という関係を与えられてみれば、それこそが一切衆生の本来の関係として、その中に安んずることができるのです。

とするなら、大乘菩薩道が、行の課題として伝統してきた自利利他が、親鸞においては、本願の信として、しかも凡夫の上に、浄土の眷属功德の自証として応えられているのです。その何者にもかえがたい仏教の歴史をくつがえすほどの大きな感動が、『入出二門偈』を製作した最も大切な理由であると思われる。

親鸞は、以上のような願生浄土の自覚道に立って、関東の人々の中で、共に如来の眷属としての尊敬をこめて、御同朋御同行と、語り続けていかれました。このように願生浄土の仏道とは、最も積極的な意味で、大義門功德と眷属功德という大乘の功德の行証に究まっていくのです。そのような内実を持つ願生の志願こそが、一切衆生の根源的な意欲として、勇氣と感動とをもって人をしてよく生かしていくものであると、仰ぐものです。

（本稿は、一九八九年十月二十六日の真宗学会大会における講演の筆録を、先生に加筆・整理していただいたものである。）